慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

平成20年度 三四会全国支部長会開催

次の百年に向けて決意新たに

平成二十年度三四会全国支部長会が、十二月十三日（土）、東京のホテルオークラで開催された。支部長会は、近藤太郎理事の司会のもと、村井勝副会長の開会の辞に続き、比企能樹会長の挨拶があった。慶應義塾創立百五十年記念式典が盛大に行われたこと、三四会のあるべき姿を将来検討委員会で検討していること、六月に選出された三四会執行部で塾医学部百年に向けて何ができるかを検討していくことについて述べた。

末松誠医学部長の挨拶では、関連病院会で、若手医師をどう育成していくか、教育中核病院の選定基準を示す予定であることを述べた。平成21年は、新病院のプランニングにより力を注ぐために三四会の力がより必要であると説明した。

戸山芳昭病院長の挨拶では、信濃町キャンパスの展開をパワーポイントと配布資料を用いて説明した。

北原光夫執行役員の挨拶では、病院経営改革のため、戦略的アウトソーシングと名付け、病院をシステム化し、できる限り委託化することを中心に説明した。医療連携室の立ち上げにも触れた。百五十年の今後の寄付については、医学部の寄付が信濃町キャンパスで使用できるよう塾企画室でパンフレットを作成中であることが示された。

つづいて各担当理事から報告が行われた。山田淑儿評議員会議長から評議員会報告、水野嘉夫評議員会副議長から名簿について、中川種昭理事から医学部新聞と新聞アンケートについて、古梶清和理事からホームページと開業医情報の案内について、菅沼安嬉子副会長と池田美智子理事から三四会女性支援委員会について、渡辺真純理事から赤倉山荘と夏に開催された第三回赤倉アカデミーについて、再び古梶清和理事から支部会則改訂後一年を経過して、名簿と規約が全六十五支部のうち二十四支部から本部に届いたことについて、吉野肇一副会長から連合三田会二〇〇八についてそれぞれ報告された。

吉野肇一副会長による閉会の辞では、五回目となった全国支部長会であったが、年末にもかかわらず全六十五支部（名簿にある八十六支部のうち21支部では支部長不在）のうち三十支部長の出席を得たことに感謝の意を表した。塾での医学部の発言力を増すためには、三四会会員の連合三田会参加者の大幅な増加と救護部隊のみの活動からの脱却が必要と力説した。

部屋を移しての懇親会は、前副会長である内匠昭渋谷区支部長による乾杯でスタートし、リー啓子理事の司会進行のもと、各支部長からスピーチをいただいた。また、末岡浩理事から新病院棟に「同窓会の場」を作りたいとの提案があり、参加者の賛同を得た。

最後に菅沼安嬉子副会長による閉会の辞で会を終了した。

（近藤太郎　68回）

新年祝賀式・医学研究奨励研究助成金贈呈式開催

一月五日午後一時より新棟十一階大会議室において新年祝賀式と「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく医学研究奨励研究助成金贈呈式が行われた。

塾歌斉唱のあと、念頭の詞として末松医学部長から、昨年は義塾百五十年の年であると同時に改革・刷新の年の始まりであったこと、来年度は医学部の定員が百十名に増員されることからも医学部教育改革の年として、卒前卒後の人材育成の重要性について昭和四十三年の武見太郎氏の回想録を引用して述べられた。

続いて賀詞として安西塾長より、世界に冠たる医学部・病院にするために今まで多くの人が一丸となって貢献をしてきたし、これからもしていきたいということ、人事制度改革が医学部から始まったことを挙げ、大学全体としても大事であること、医学部百年に向けて教育、研究、医療のレベルをより上げて行ってほしいことなどが述べられた。また、予防医療センターと臨床研究棟Ⅱ（仮称）に続いて、新病棟の完成への意欲が明確なメッセージとして伝えられた。比企三四会長は三つの重要なこととして、第一に全国各地の三四会支部と地域三田会との密な連携を促進した。第二に三四会として、全塾員の健康管理と健康指導のためのサービスを検討する。第三に三四会の将来像について更なる飛躍のために皆で考える年にしたい。その為の検討委員会を理事会に設置する。教職員代表として久保教授より、義塾百五十年式典に感動したこと、四十年前にすでに古いと感じた病棟がまだ使用されていることから、新病棟の建設が急務であること、医学部長は若さを生かして、ぜひ改革を進めてほしいことが述べられた。

引き続き、医学研究奨励事業委員会小川委員長より、採択者の紹介があり、金井隆典君、中島秀明君が採択され、安西塾長から研究助成金の贈呈がなされた。

医学部および医学研究科 クイーンズランド大学クイーンズランドブレインインスティテュートと協定締結

平成二十年十一月二十六日(水)、慶應義塾大学医学部(末松誠医学部長)および慶應義塾大学医学研究科（岡野栄之研究科委員長）とオーストラリアのクイーンズランド大学（The University of Queensland）クイーンズランドブレインインスティテュート（QBI：Queensland Brain Institute, Director Perry Bartlett教授）は、研究協力に関する学部間協定を締結し、QBIで行われた調印式に、岡野栄之研究科委員長が出席しました。調印式に伴い、岡野教授による記念講演も行われました。

クイーンズランド大学は、一九〇九年に創立されました。オーストラリア大陸の北東部クイーンズランド州に、三つのメインキャンパス、病院、研究施設など、四十八もの拠点を擁します。QBIは、二〇〇三年に新設された、神経科学分野における世界有数の研究拠点です。本協定の締結により、両者間の研究員や学生の相互派遣、個々の研究プロジェクトにおける協力など、多面的な交流が期待されています。

なお、慶應義塾大学とクイーンズランド大学は、一九八一年に全塾協定を締結しており、以来交流が続いています。

署名式にて（左）岡野栄之教授（慶應）、Perry Bartlett教授（Director of QBI）

北島政樹名誉教授 米国外科学会名誉会員に推戴

北島政樹名誉教授（45回、外科学）は、平成二十年十二月十五日、米国外科学会(American College of Surgeons：ACS)より名誉会員（Honorary Fellow）に推戴された。

米国外科学会は一九一三年に創設された米国最大規模の外科系学会で、会員数は七万四千名にのぼる。現在我が国からは、百四十名の正会員（Fellow）が登録されている。米国外科学会名誉会員（FACS(hon.)）の称号は外科領域で特に功績のあったものに付与され、我が国ではわずか九名にのみ与えられているが、私立大学からの推戴者は北島名誉教授のみである。今回、日本からは八年ぶりの推戴となった。

北島政樹名誉教授は一九九九年三月より米国外科学会日本支部次期会長、二〇〇〇年三月から二〇〇一年十月まで同会長を務めるなどACSに大きく貢献したほか、数多くの国際的な業績が高く評価され今回の推戴に至った。これまでに、アメリカ外科学会（American Surgical Association）、英国イングランド王立外科学会（Royal College of Surgeons of England）、ドイツ外科学会(German Surgical Society)、ドイツ消化器外科学会(German Society of Gastrointestinal Surgery)、イタリア外科学会（Italian Surgical Society）、ハンガリー外科学会（Hungarian Surgical Society）から名誉会員の称号を授与されており、今回のACS名誉会員推戴は、北島政樹名誉教授の国際的なアクティビティの高さを再認識する慶事といえる。

来る十月十一日に米国シカゴで開催される米国外科学会定期学術集会において授与式が行われる予定である。

（和田則仁　外71回）

来年はぜひ皆で参加を！ 福澤先生誕生記念会

毎年一月十日は福澤先生の誕生記念会が三田で開催され、それに引き続いて学生食堂で新年名刺交換会がにぎやかに行われている。今年は土曜日であったので、久しぶりに参加でき、慶應義塾の雰囲気を楽しむことができた。

今年は百七十四回記念会で、例年どおり西校舎ホールはほぼ満席の状態であった。

会は、幼稚舎生による「福澤諭吉ここに在り」と、ワグネル・ソサィエティーによる「日本の誇り」の二つの合唱から始まった。後者は一九三四年、日吉開校の年に福澤先生誕生百年を記念して作られたとのことであるが、その二番には、「涯なし日吉台」「四谷に学ぶもの」というくだりがあり、当時より現在の信濃町キャンパスが塾内で大きな役割を担っていたことがしのばれ、とても感慨深かった。

安西塾長による「年頭所感」は、塾創立百五十年に当たった昨年、記念式典をはじめとした各種ビックエベントが無事に終わったこと、順調な募金成績などに関する報告と謝意が述べられた後、新生大学院、薬学部等についての基本的な考え方、各キャンパスについて、建設事業等を交えての報告ないしビジョンが開示されたほか、塾高野球部の甲子園での大活躍そして明治神宮大会での全国制覇などにも言及された。

記念講演は、「福澤先生と北里柴三郎」という演題で、北里一郎君（工、一九五五年卒。塾理事・評議員・連合三田会副会長、明治製菓㈱最高顧問）によって熱く行われた。祖父君であられる柴三郎先生がお受けになった福澤先生のご恩と、それに見事に応えられた柴三郎先生のことを、ご自分でもおっしゃっていたとおりの柴三郎先生譲りの外見を活用され、それに加えて見事なユーモアが交えられた見事な大講演で、終了時の喝采がしばらく鳴り止まぬほどであった（写真上）。機会をお作りしてぜひとも再演を、とくにわれわれ三四会会員の前で、していただきたいものである。

そして福澤家を代表して、福澤先生の曾孫のお一人であられる福澤信雄様より、謝辞を含めたご挨拶を頂いた。

続いて小泉信三賞全国高校生小論文コンテスト表彰状授与が、塾長によって行われた。この表彰は、一九七六年に小泉塾長没後十年を記念して作られた「課題」を課しての制度であり、今回の課題は、「『福翁自伝』を外国人が読んだら」「高校生の私」「許せないこと」であった。

最後に全員で、塾歌を粛々と斉唱した後、皆、ぞろぞろと同じ西校舎内にある学生食堂に移動し、新年名刺交換会が開催された。交換会は、福澤武 塾評議員会議長の乾杯のご挨拶で始まり、豊富な飲み物と料理を囲んでの懇親の場が展開された（写真下）。塾長との直接対話を望む人も多く、順番待ちで長蛇の列になっていた。ワグネル・ソサィエティーの伴奏のもと、全員で「若き血」を声高らかに合唱し、一時半にお開きとなった。

以上の経過は、例年、ほぼ同様に繰り返し行われているとおりである。

ここで私は、三四会会員各位に、この会に参加されることを強くお勧めしたい。 理由は、この午前十時半から午後一時半までの約三時間で、慶應義塾全体の動向、息吹などを肌で感じることができるからである。その基本は、塾長による年頭所感にある。これは例年、三十分以上に及ぶ長いものであり、時間に、より制限されていると思われる入学式、卒業式、連合三田会大会等での塾長挨拶よりもはるかに充実している。冒頭部分で述べた本年の塾長所感を、信濃町キャンパスないし三四会的に追加すると、次のようなことが述べられた：百五十年記念事業としての信濃町キャンパス改築作業は順調に進んでいる。これから新病院棟建設などに向かうのであるが、それには以前から言ってきたとおり、医学部・病院の内部改革が必須である。幸いその方面も進んでいるようであり、また三四会のご協力にも感謝申し上げたい。

以上については、後日、小泉信三賞全国高校生小論文コンテスト受賞作品を含めて、『三田評論』などで詳細に紹介もされるが、現場の迫力にはほど遠く、また、活字となるとさらに人の手が入ってしまい、熱気が薄まってしまう。

続く名刺交換会は、所狭しと、入り乱れての立食パーティであるが、普段見聞きできない異分野における塾のさまざまな様子を垣間見られるし、先生誕生記念会と合わせると、何よりも自分が塾員・社中の一員であるということを再確認・体感できるゾーンといえよう。本年は、末松医学部長・岡野医学研究科長ご両人に、この名刺交換会でもお会いできた。

冒頭に述べたように、われわれの医学部がある信濃町キャンパス（かつての四谷キャンパス）は、塾内できわめて歴史のあるキャンパスであり、また中世ヨーロッパで始まったuniversityには、医学部は必須であったことなどを、改めて考える必要があると思う。ややもすると信濃町に留まりがちなわれわれの眼を、広く塾全体に向け、医学部のリーダーが塾全体でもリーダーシップを発揮できるような土壌を、三四会でも作っていきたいものである。

来年は百七十五回目という節目であり、かつ一月十日が日曜日なので、大混雑が予想はされるものの、この一連の塾公式行事に参加するのにまことに好都合である。詳細については例年、『三田評論12月号』に公示されるが、本紙でもまたご案内をさせていただくつもりである。なおこの誕生会の様子は、http://www.keio.ac.jp/ja/news/2008/kr7a4300000mgk9.html に掲載されており、ここに用いた写真はその一部である。

吉野肇一（副会長44回）

平成20年度 慶應義塾大学関連病院会秋季総会開催

平成二十年度慶應義塾大学関連病院会秋期総会は平成二十年十一月二十九日（土）十四時三十分から新棟十一階大会議室で開催されました。参加者は医学部側から末松医学部長、戸山病院長を始めとして森川、青木、天谷、小川(郁)、中川、相川、福田の各教授、平形専修医研修センター長、原病院事務局長、山本病院事務局次長、舘信濃町メディアセンター事務長が出席し、関連病院側からは会長、副会長のほか各病院長が出席し総勢66名の参加であった。

細田副会長の司会の下で第1号議案平成二十年度春季総会以降の庶務報告に関する件、第2号議案 平成二十一年度の総会日程に関する件で、春季総会を平成二十一年六月二十七日（土）に、秋季総会を平成二十一年十一月十四日（土）に開催する予定である事が、細田副会長より報告された。その他として『慶應関連病院電子ジャーナルコンソーシアムに関して』福田医学部長補佐から関連病院側に説明があり、質疑応答がなされた。

会長挨拶の後、末松医学部長から「慶應義塾大学医学部・病院の改革と刷新～専門研修コースと地域医療医師派遣促進策～」と題して講演が行われた。専修医研修や医師派遣についての現況報告、また十一月に行なわれた教育中核病院選定基準に関するアンケートの項目について説明が行われ、平成二十一年一月にアンケート調査が行うことが報告され、質疑応答がなされた。この結果に基づいて教育中核病院のランキングが行われることになる。

続いて司会を高木副会長に代わって二つ目として中澤堅次済世会宇都宮病院院長が「医療安全調査委員会設置法案大綱案その後」の題で講演を行い、質疑応答がなされた。

その後懇親会に移り細田副会長の司会でA、B会員が集い懇談が行われた。

今回の総会で注目すべきは医学部と関連病院との連携協議会が発足して教育中核病院選定のためのアンケート調査が行われることになったことである。勤務医不足に悩む施設からは医師を引き上げてから実態調査を行うことに対し疑義がある旨の発言があったが、概ねの賛同を得て慶應義塾大学関連病院が築きあげてきた卒後教育体制の充実を図る再出発になる総会であったと考えている。

（松本純夫　関連病院会会長・東京医療センター　外52回）

鑑往知来

リーマンショックに端を発した百年に一度とも言われる大不況の嵐に、いまや全世界が戦々恐々である。日本とて例外ではなく、あの世界のトヨタを始めとした大手大企業が、次々と空前の赤字決算に陥り大量の人員削減計画を発表せざるを得ない状況を、一体誰が予想出来ただろうか。

勿論これはアメリカ発のサブプライムローン問題という直接の原因があるにせよ、その後の急激な消費の落ち込みが追い打ちをかけ、トヨタでも株式の評価損や円高騰による為替差益損の他に、新車を中心とした購買意欲の大幅な落ち込みが大きな影響を与えている。

一方、我々の医療・介護の世界はどうだろう？医療・介護の絶対的な「消費者」である後期高齢者は、五十年後には、二千万人以上と倍増する。（国立社会保障・人口問題研究所推計より）。少なくとも今後五十年間はいわゆる「需要」が冷え込むことも無く、その代価の大方も確実に入金されると言う、他の産業からみれば垂涎の保証がなされているのである。

しかもこの社会保障分野の「総波及効果」は全産業の平均より高く、何とあの悪名高き?公共事業よりも高いという（社会保障国民会議資料より）。つまり、超高齢化に伴う社会保障需要が伸びることで、社会保障分野の産業生産性が増加し、それによる原材料購入や雇用の増大等を通じて、次々と各産業の生産性が誘発される（一次波及効果）。更にこれが所得と消費を増大させ、更なる生産増を生むのである（追加波及効果）。言わば社会保障費は、消費ではなく立派な投資なのである。

今こそ、オバマ米国新大統領の「グリーンニューディール政策」に対抗した、言わば日本版「社会保障ニューディール政策」を提唱したい。そしてこれこそが、今瀕死の重症とも言える救急医療を始めとした医療全般を立て直す一番の近道と考えるが、いかがであろうか。

（池端幸彦　日本慢性期医療協会事務局長　59回）